秋田県立博物館研究報告第40号　79～89ページ　2015年３月
Ann. Rep. Akita Pref. Mus., No.40, 79-89, March 2015

名誉館長館話実施報告抄

新野　直吉 *

佐々木　義武・松本　力治（上原　敏）・中島　照

はじめに

本年度は、５月16日（金）「原初日本の国際性」、５月30日（金）「好太王碑探訪懐古」、６月13日（金）「建国神話と諏訪勢力」、６月27日（金）「陸奥と出羽」、７月11日（金）「軍者五十棲六十郎の諫言」、７月25日（金）「秋田と信淵」、９月12日（金）「佐々木義武」、９月26日（金）「松本力治（上原敏）」、10月10日（金）「中嶋照」、10月24日（金）「布伝能麻迩万珥（10）」、11月14日（金）「布伝能麻迩万珥（11）」、11月28日（金）「布伝能麻迩万珥（12）」の12回の館話を行った。

ここでは、９月から10月にかけての先覚関係の３回分について文章化して報告する。

佐々木　義武

明治42年（1909）４月３日秋田県河邊郡大字和田の名門である佐々木家に慶助・カツの四男義武が生まれた。和田の地名が中世の名将和田義盛に由来するということから、兄達も義久・義茂・重義と名前に「義」の文字が附されている。父慶助は18代目の家長であった。

大正11年（1922）小学校を卒業し４月に県立秋田中学校に入学した。家から通学は遠いので下宿生活をし、野球部に入った。体格の良い彼の熱心な練習は、能力秀れ３年生では三塁手六番打者として地区予選を勝ち抜き、大正13年の初めて甲子園球場が会場になった年の全国中等学校野球選手権大会に、秋田中学が出場した時には、相手が強豪松山商業だったために、１対13という大差で一回戦で敗退した。奮起した彼は一層努力して次の地区予選に出たが、４年生では決勝に敗れて県代表になれず、最上級５年生の際は主将として臨んだ県大会では、奥羽地区の代表決定戦に山形中学に敗れて、再び甲子園に出る夢は果たされなかった。しかもこの敗戦は野球のことだけにはとどまらない事態を招くのである。

勝ち気な母親カツに「大事な決勝で敗けて、もう二度と家に帰ってくるな」と叱られたというのである。厳しい母親だとも思うが、さもありなんとも受け止められる。母は南秋の天王の名家二田家の出だったのである。耕地山林数百町歩を所有する大地主であっただけではなく、その実家を嗣ぐ兄の二田是儀は第一回帝国議会の段階からの代議士であるという、誇るべき家に生まれ育ち現在は河辺の名家の「家主」なのであるからである。

そしてその血を享けている義武の母の叱咤に対する行動は、実に彼らしいものであった。登校することも下宿に居ることも捨てて、五城目の伯母（母の姉）の家に厄介になり、受験勉強に没頭した。本来能力を備えていたのであるから、猛勉の成果で、昭和２年（1927）春現役で山形高等学校文科乙類に合格した。思うに夏の野球敗退以後学校とは縁を切っていたのであるから、秋中五年の卒業は不可能であった筈であるが、高等学校の受験資格は「四修」で可能であるから、その資格で入試に臨み真の四修秀才と同列の立場で高校進学したということになろう。

その高校生活も亦一年二年は、スポーツと遊びとで満たされ、更に「飲んで」と義弟の楢崎泰昌氏叙述の「夕日と友情」なる伝記に記されるから、山形の街を飲み歩くことも少なくなかったのであろう。しかし高校入試と同じように、第三学年の猛勉強で東京帝国大学経済学部に昭和５年４月合格入学したのである。高校生の間に飲み歩いた友人に、新潟の大地主で代議士である父を持つ、稲葉修氏がいた。後年同じ政治家になって活躍する深い縁が、既にこの高校時代に結ばれていた訳である。

昭和８年（1933）３月東大を卒業して４月南満洲鉄道会社に入社した。「大学は出たけれど」と

*秋田県立博物館

いわれていた当時の不景気社会で、600人が応募して11人のみが難関突破入社できたというのであるから、幸運を掴むものを備えていたのであろう。「五尺八寸、二十貫」という体格も評価された可能性はあるが、何れにしても役人の給料が高等文官試験合格者で75円だったのに、満鉄は80円の高給で、更に50%の加給が付くという大連の本社勤務になったのである。

ここで特異な現実が生まれた。彼に通訳がついたという話題である。「ヨシタケの思い出」なる三輪武なる人の追憶談が残っている。「佐々木が私よりひと廻りも後の卒業」と記されるから、山形高校の12年も先輩なのであろうが満鉄には同じ昭和8年に入社した人である。佐々木は普通に聞き取れたらしいが、彼の発音が「ヨシタケ」は「ヨスタケ」と発音されていて結局直らなかったらしいのである。だから「秋田なまりは、議論に熱がこもればこもる程、時に意志不通になることも少なくなかった」ということになり、山形生活3年で東北弁にも理解のある三輪氏が、「ヨシタケの話も大方理解出来たので、勢い通釈（訳か）の労をとることも屢々だった」と述べている。本人の自己紹介では「ササキ、ヨスタケ」とはどんな字かと問われて、「忠義の義に、ブス（武士）のブ」と答えるものだから、初めのうちは実際に「ヨスタケ」と呼んでいる人もいたというのである。

だから衆議院議員になってからの後輩などは「自分の信じているところをこんこんと東北弁の訛のある言葉で長時間説かれたことを思い出す。その折りの先生のとつとつとした語り口、暖い思い遣りを私は思い浮かべる」という効果ももたらしたらしい。昭和61年12月20日付の中曽根康弘総理大臣の『弔辞』にさえ「その秋田のズーズー弁を以て鳴る天衣無縫の達人で、どこか総理大臣海軍大臣をやった米内光政氏に似た頼母しさと、凛々しさが、漂っていました」と述べられているので終生直ることはなく、むしろ特徴になっていたわけである。

昭和10年（1935）12月29日大毎満洲総局長楢崎観一の長女淑恵と結婚するが、先輩から縁談を持ちかけられ、見合写真を見て胸が高鳴ったというから、話は順調に進んだのであろう。大阪の大手前高等女学校を卒え、大連の人文学院英文科を卒業したばかりの19歳の相手であった。結婚式は大連ヤマトホテルで挙げられた。

結婚して間もない11年に大連から新京に移住した。満洲鉄道が新京からハルピンまで運行を延長させ、南満洲ではなく広く満洲に関わることになったからである。そもそも関東洲と南満洲鉄道の経営は日露戦争の結果ロシアから移譲されたものであったが、満洲国が出来てから満鉄の経営は新京（長春）以南ではなく拡大されたのである。従って義武の属する調査部の仕事は、必然的に全満洲の文化・経済・産業を対象にするように広がったわけである。そして翌12年（1937）7月にあの盧溝橋事件が起こり、大陸に本格的戦火が燃え上ったのである。

10月満鉄北京調査所が設置されると、佐々木は選ばれて北京に派遣された。彼のみではなく一緒に仕事をしていた同僚も、半官半民的な国策会社のことであるから、北京勤務になった。勿論妻女を伴う者もいた。彼もその一人であった。同僚の井上照丸という人への追憶記から「夕日と友情」に引用されている「北京時代は照丸にとって、小生同様、人生最良の歳月であったことだろう。老北京の残香は未だ十分であり、いい意味において青春の情熱を燃やす場としては、すべての条件がととのっていた。新婚生活を北京で始めた照丸が幸せを態度で示して周辺を悩ましたのもその頃である」と述べている文章は、引用者が「周囲を悩ましたのは義武と同罪であろう」とわざわざ評言を記している通り、佐々木夫妻の北京生活は、伝統文化の「残香」と表現されたものに囲まれた生活だったのであると認められる。

それは昭和13年12月に「興亜院」という官庁についての制度が公布され、14年（1939）春にそれら満鉄の職員の中から彼一人だけが、「興亜院華北連絡部」に出向を命ぜられ、同じ北京におりながら満鉄の同僚と離れ、14年12月には興亜院勤務の官吏になり、満鉄退社のうえ高等官六等に任官することになるが、本質的には昭和50年に書いた「大陸仲間」（日経）という文章に「その生活ぶりは、私のような青二才でも数人くらいの食客を養いながら読書三昧に過ごしているかと思

えば、満蒙の農家に滞在して行う農村実態調査や哨煙消えやらぬ占領直後の華北各地の実情調査など命がけの仕事に取り組むこともしばしばで、今日のサラリーマン諸君には到底想像もつかないものがあったのである」とあるのと変わらぬ生活場面も続いたのであろうと考えられる。

興亜院の「連絡部」が北京・上海・張家口・厦門の四カ所にあり、各省から元気な若手の官僚が派遣されていた。大蔵省からの大平正芳・大槻義公・宮川新一郎・若槻克彦・商工省からの村田恒・鹿子木昇、農林省からの伊東正義、鉄道省からの磯崎叡、そして満鉄からの佐々木義武の９名で「九賢会」という集合体を形成し交情を深めた。それに先輩の大蔵省からの愛知揆一が客員扱いで加わり、義理人情に恵まれた結合であった。長くその信頼関係は生き続ける。

官僚としての彼の身分は、昭和 17 年（1942）４月企画院調査官に任ぜられて帰国東京大森に居を構えた。18 年４月には大東亜省調査官になった半年後の 10 月、召集令状が彼に発せられた。もう 34 歳の高等官なので直属上司の愛知経済課長は、軍に入らなくてもいいような手続などを考えるといったが、彼はそれを断り入隊した。戦時下男子だったらそうするのが常識だったのであろう。官務の引継ぎなどで忙しい数日の後、帰郷するために上野駅で見送りの人々に混り立っていた淑恵夫人は、上野駅で見送れといわれていたのでその心算でいたのに、時間が来たらいきなり手を取られ切符も持たないのに改札口を通り秋田への列車に乗せられたという。座席もなく新聞紙に坐った夫人を伴い河辺の実家に着いた義武は、２泊の余裕しか無くて青森の部隊に入営し数日後には満洲に移動した。

昭和 19 年初夏に満ソ国境に近い「北安」という駐屯地に、親類を代表して夫人は慰問の面会に北満まで出かけ、その長途面会に感じた部隊長が、従卒として夫を連日外出許可で二人を会わせ、二人は「義武は日本一幸せな一等兵だ」という実感を持って、夫人は新京の従姉妹のところに戻った。

更に幸せは続いた。部隊は間もなく南方に向ったが、彼は出発寸前に幹部候補生に合格し、同じ立場の同僚と二人だけハルピンに残り教育を受けることになった。更に秋になると彼は経理部の幹部候補生試験に合格したため、昭和 20 年１月から東京国分寺の陸軍経理学校で学ぶため帰京した。夫人は、毎週面会に赴くために父の荻窪のアパートに独り住んで対応につとめたという。附記すれば彼が北満で属していた部隊は南方海上で戦地に向う航海中米軍に撃沈され、帰る生存者はいなかったという。20 年（1945）８月 15 日の終戦で、陸軍主計少尉佐々木義武は荻窪の夫人の許に復員することができた。

官職も無くなった形で夫妻は秋田の長兄の許に身を寄せていたが、10 月半ばに大蔵省の橋本竜伍から戦後処理の業務があるので至急上京せよと電話が入り、上京して「大東亜戦争調査会事務局調査官」となり戦後改革に参画した。郷里の佐々木家も二田家も「農地解放」で田畑は失ったが、昭和 21 年５月に成立の吉田内閣のもと８月「経済安定本部」が創設されてそれに属し、22 年（1947）６月 10 日「生産局化学第一課長」の役職についた。

昭和 23 年（1948）８月５日「動力局配炭課長」31 日「同局炭生産課長」に就任した。この頃郷里の母カツと長兄義久は山林 20 町歩程を処分して、荻窪三丁目に義武夫妻の自宅を建築して与えた。長く彼の居処となった。24 年３月には短期で終った芦田内閣に代って 16 日に第三次吉田内閣が出来るが、４月には１ドル 360 円の固定為替レートが設定される中で、６月 25 日「総裁官房経済復興計画室長」に就任する。この年は 10 月に中華人民共和国が成立する。25 年（1950）６月 25 日朝鮮戦争勃発、日本の政治・経済に大きな影響をもたらすことになる。

昭和 26 年（1951）９月８日桑港條約締結、日米安保条約調印などの重要な外交があり、翌 27 年８月に、彼は「経済審議庁計画部長」となった。この月 28 日に吉田首相は「抜き討ち解散」を断行し、池田蔵相秘書官を務めていた親友大平正芳が、10 月１日の第二十五回衆議院選挙に香川二区で当選、友人国会議員第１号になった。

昭和 29 年（1954）６月防衛庁が設置され、自衛隊法が公布される。12 月鳩山内閣成立、30 年 11 月保守合同で自由民主党が結成される政界の動きがあった。その直後 31 年（1956）元日に「総

理府原子力局長」となり、5月19日には初代の「科学技術庁原子力局長」となった。原子力産業が新時代の注目政策となっている時期に誰よりも先にこの要職を担ったのである。

昭和32年（1957）２月には岸内閣が成立するが、彼の原子力局長の任は変らなかった。34年には4月10日世をあげて祝福歓喜の皇太子御成婚があり、時代は「岩戸景気」といわれる状況になる。だが35年（1960）は安保反対の動きで国会周辺は連日デモに見舞われた。局長室から状況を見ている彼は、官界から政界に転ずべきだと考えるようになる。国会答弁で彼の説明を「日本語で答弁しろ」と方言を野次られたことも一因だという。6月15日「原子力局長」を辞任し、18日「科学経済研究会理事長」になった。官僚を辞したのである。８月には自由民主党に入党した。７月下旬には実家にも「衆議院の選挙に出る」という連絡が入った。

実は実家の当主義弘は父の遺訓である叔父の選挙出馬反対の立場にあった。天王町長でもあり、戦時中代議士の経験もある二代目二田是儀に上京して、出馬断念の説得をして貰うことにした。この是儀氏は山形県出身で東大哲学科卒業、大学院で印度哲学を研究していた人で、同県出身者として対面の経験があるが、重厚な人であった。出馬は簡単でも当選は難事だと説得する筈だったが、義武の熱意に対応して応援することに転じてしまった。８月に自由民主党公認候補として夫人と共に秋田に入った義武の選挙運動を先頭に立って指揮した。11月20日の選挙では５万２千票余の最下位得票ながら、晴れの衆議院議員初当選を果たしたのである。

昭和40年（1965）6月8日厚生政務次官となり、42年には自民党労働部会長、43年自民党秋田県連会長として次第に政界でも重きをなして来た。国際的な分野でも、昭和37年平和部隊に関する国際会議に政府代表顧問としてプエルトリコに出張、39年には第３回原子力平和会議及び第８回国際原子力機構総会のためウィーンに赴き、42年には宇宙開発視察に米・仏・ソを歴訪した。

昭和47年（1972）12月自民党総務会長・衆議院農林水産委員長、49年三木内閣国務大臣、52年には原子力問題で訪米、中国訪問、54年１月通商産業大臣、55年（1980）政府代表先進国首脳会議で訪伊、宏池会訪中団長と活躍する中、６月盟友大平総理が急逝で悲嘆、鈴木内閣に、57年（1982）には中曽根内閣にと移る中、59年自由民主党衆議院議員総会長となり、60年10月永年在職表彰、11月勲一等旭日大綬章叙勲と栄誉の中61年（1986）６月連続当選９回の議員勇退。これから悠々自適かという中で、12月13日逝去、78歳。

松岡　力治

松岡力治（上原敏）は、秋田出身の歌謡音楽家として東海林太郎と並ぶ存在であるといえる。ただ東海林は74歳の人生を全うしたが、上原は30代半ばで世を去り、壮年期後半以後の期待される歌謡人生を戦争のために空しくしたという、大きな差異を形づくったのである。

やがて上原敏となる松本は、明治41年（1908）８月26日に秋田県北秋田郡大館町大町に、父竹之助・母ハルの次男として生まれた。生家は「煉屋」という屋号の荒物・雑貨を扱う商家であった。長男の兄弥太郎は力治より14歳も離れた年齢差があった。父は商人ながら趣味の義太夫に長じていたというから、彼も美声の遺伝子に恵まれていたのであろうが、音楽に親しむことのできる好運にも恵まれた。

大正４年（1915）４月入学した大館男子尋常高等小学校で、２年生から５年生まで、音楽教育にも秀れた志賀元八という担任教師の、大正デモクラシーの情操教育で学習し生長する幸運に恵まれる。唱歌の授業時間もお決まりの形式通りな教科書教育ではなくて、西条八十や北原白秋、そして野口雨情などの新童謡を「赤い鳥」誌などによって学ばせた。

しかし６年で尋常科を卒業して直ぐ中学校に進学したのではなかった。父親が中学受験を許さなかったらしい。高等科に入り、２年を修了してから大正12年（1923）４月に県北唯一の中学校だった、県立大館中学校に入学した。

ところが、そこでもまた良き教師に恵まれた。そこでは、小学校高等科時代に身につけていたバイオリンの演奏の巧みさを評価されていたとい

う。当時は提琴と書かれたバイオリンの子供達の教室も開かれていて人気があるような、文明開化時代であったのである。

中学校では青山学院出身の阿部六郎という、鹿角郡長の小田島由義の六男に生まれた秀れた教員の指導を受けて、人格形成に好影響を得た。因みに言えば、平成21年度に採り上げて話した小田島樹人（次郎）の弟である六郎は、阿部家を継いだ郷土文化の研究発展に努めた人物であった。大館中学校に赴任する以前には、栃木県や静岡県で教員経験のある広い視野を持つ先生であった。

こうした教育で形成された自主性で、「世界少年」で見る西条八十の詩に作曲して投稿を試みるような積極的行動をしていたが、最上級の５年生になった夏休みには、父には言わず東京に出て大和田愛羅という音楽家の個人レッスンを受けるまでになっていた。

当然希望は音楽学校進学であったと受け止められるが、所詮父親の許可は受けられなかったのであろう。中学校を卒業すると、大館を離れることなく大館男子・女子両小学校の代用教員を勤める。

彼には音楽とならんで極めて得意なものがあった。それは野球であった。４年生の時には正式に野球部員となって足の速い外野手として活躍していた。そして進学はその線で道が開かれた。

昭和４年（1929）４月専修大学予科に入学する。中学では１年後輩の島宮竹治と共に、専大野球部に入り、レギュラーの外野手として、在学中には昭和６年春と８年春の２回五大学リーグで優勝を経験する。

この野球部には大館中学で４年先輩の秩父重剛が主将の外野手として活躍していた。明治38年７月生まれの秩父は能代の出身でまだ大正14年（1925）創立の能代中学校は無かったので、大館中学に進学した訳であろうが、大館の文化史に詳しい伊多波英夫氏は野球部を通じての秩父・松本の繋がりを注視している。重剛の本名は重雄で、昭和15年（1940）には母方の家を継ぎ小川姓に転ずることになる。

昭和９年（1934）専修大学経済学部を卒業した松本は、「わかもと製薬」に入社し宣伝部に属し勤務するが、同社の野球部員でもあった。音楽好きの本性に変わりはなく、10年（1935）「ポリドールレコード」の子会社である「コロナレコード」から「須坂小唄」を吹き込んだ。先輩秩父はポリドールの文芸部の社員であった。ポリドールの野球部は著名で、野球の好きなサトーハチローはそこが魅力で同社専属だったという。東海林太郎も所属したという。

「わかもと」の野球部員であった松本は、秩父先輩のいる「ポリドール」野球部に出向いて、打撃練習のピッチャーをしていたが、東海林が９年に出した「国境の町」を口ずさんだことが、野球の名手である作詞家藤田まさとの耳にとまって、歌手の道に進むことになったといわれるが、藤田が彼に注目するきっかけは、秩父先輩の推挙であったという。何れにしても同郷の秩父・東海林・上原の結びつきが、秋田出身名歌手の誕生をもたらしたということは、注目に値する。

ところで松本の芸名が「上原敏」になったのは本人の発案ではないという。本人の意中にあったのは「大中修二（おおなかしゅうじ）」であったというが、藤田らと企画の中核に居る榊原道雄文芸部長が、自身の尊敬する「上田敏」博士にあやかる「上原敏」の芸名を選んだものだという。上田博士は、明治７年（1874）生まれの西洋文学などの翻訳に業績のある学者で、東大や京大の教授でもあった学者詩人である。英・米に留学経験もあり、「審美的批評」と表現される分野の第一人者であった。明治時代大勢的であるとも言える自然主義文学に対し、博士は「耽美派」の代表的存在であった。文芸部長は、松本に東海林と違いしかも並ぶ「美声美唱」を期待したものであろう。

正式なデビュー曲である昭和11年（1936）６月発売のレコードは、Ａ面はやがて中山晋平夫人になる新橋喜代三とのデュエット「月見踊り」、Ｂ面は著名な彼単独の「恋の編笠」であった。

そして翌12年（1937）４月発売の「妻恋道中」が、41万枚の大ヒットとなったのである。数え年30の主人公はここで結婚をすることになる。５月に桜田澄子というオルガン伴奏で彼を支えた女性と結婚することになる。

実はその前に「恋の絵日傘」なる都会的な作品が世に問われ好評だったというが、東海林に似た

歌謡法だったので批判もあった。しかし彼はその歌い方を好み、有名な「赤城の子守唄」の作詞家藤田まさと、作曲家阿部武雄のコンビに指導を受けた。阿部は鶴岡出身の東北人だったので、親しく発声などの指導してくれたという。12年(1937)５月の「妻恋道中」も６月の「流転」もこのコンビの作であって、上原の名を広く知らしめた。７月の結城道子と掛け合いの男女歌「裏町人生」は作詞は島田磬也だったが、作曲は阿部で、更に彼の名声を高めることになった。道子の本名は由利文子でその父は秋田出身者だった。「娘船頭さん」「声なき凱旋」「男なりやこそ」「陣中ぶし」などと続く。

ところで妻の澄子は北海道の滝川の出身であったが、その姉は秩父重剛夫人昌子であった。秩父は作詞家志望であったが、人名辞典などを見れば浪曲作家となっている。大阪の朝日と毎日の両新聞社が懸賞をかけた有名な浪曲家吉田奈良丸のための浪曲に応募した作品「滝口入道」が入選してその地位を得たのであった。初レコードは「板割の浅太郎」で大ヒットし、本名重雄から重剛と称するようになった。昭和21年刊の『浪花節大全』(八興社）はその著作である。

ところで「妻恋道中」には因縁話もある。この道中物は「旅笠道中」に続く東海林の歌という企画だったのに、平成10年（1998）の館話の最初に扱った先覚東海林太郎の際にも触れたが、東海林家にはまだ10歳に満たない高峰秀子が、彼を「お父さん」と呼ぶ「模擬のお嬢さん」として２年間も暮らしていた。その秀子母子を東海林家に導いたのは藤田まさとであった。しかしお嬢さん的に可愛がられた秀子はよかったが、その母は使用人的扱いであったらしく、２年間で母子はアパート暮らしに変った。母子を援護する藤田と母に対して冷たい東海林との間に対立が生じたために、ポリドール内で反対論もある中で、藤田は上原起用を強行したのであった。藤田が「10万枚」は売ると言っていたのに、何と41万枚の大ヒットとなったというのである。勿論準備に新人上原は非常に濃密な歌唱訓練を行ったという。いうまでもなくいくら訓練しても歌手本人に力がなければ大ヒットは出せない。歌は映画化され、銀幕上には上原の歌声が流れた。

昭和12年が画期的な年だっただけではなく、翌13年（1938）１月発売の「上海だより」が大評判になり、同年中に「南京だより」「北京だより」「漢口だより」「北満だより」「広東だより」と続いて世に問われた。「拝啓御無沙汰しましたが、僕もますます元気です。上陸いらい今日までの、鉄のかぶとの弾のあと、自慢じゃないが見せたいな」という「上海だより」の歌詞は、当時小学６年生だった私の記憶にも残っている。大国民歌の「愛国行進曲」も吹きこんだ。

13年３月にはこの年「鴛鴦道中」を共に歌った青葉笙子らと、初めての大陸戦地への皇軍慰問の旅に赴く。戦地慰問はこれから５年間に７回行うことになる。笙子は仙台生まれで東洋音楽学校出身者であった。上海－南京－常州－無錫－太湖－蘇州などを巡ったが疲労と寝不足の重なる１カ月半に及ぶ「皇軍慰問」の歌奉公であった。

昭和14年（1939）にはマドロス物の流行と関係するのであろう。樺太にも渡って活躍している。樺太といっても当時は明治以来の日本領である南樺太であるが、「波止場気質（かたぎ）」「唄うマドロス」「夜霧の出船」などを歌っている。

そしてこの年に目を惹くのは、彼が歌う「春香伝」に名女優田中絹代が台詞を入れていることである。もちろんこういう台詞入りは一つの歌謡曲の形式で、彼の歌でも前年の「愛馬の唄」なる作品にも佐野周二の相当長い台詞が入っていた。単に映画俳優の台詞関与だけではなく、活動写真と言われていた映画に彼自身が出演するケースもあり、「金語楼の大番頭」なる東映作品に清川虹子と共演している。また、「蒙彊だより」「大陸だより」の「たより」曲の追加作品もあった。

昭和15年（1940）には或る意味では画期的なこともあった。８月に初の帰郷公演が行われたのである。勿論個人的に帰省した昭和12年には、元の職場ともいえる大館女子小学校講堂で歌ったこともあったが、今度の場合は秋田魁新報社の記念事業で懸賞募集で選ばれた「華の秋田の矢留隊」という、郷土部隊を讃える歌の発表会という、時局にマッチした公的行事に招かれての日程であったので、先ず８月１日は秋田市千秋公園の県記念

館で昼夜２回の公演であり、２日・３日には郷里大館の常盤座で昼夜４回の公演だったが、当然県出身の人気歌手の歌を求めた人々で超満員の聴衆であったという。

この年には主な新曲として「紀元は二千六百年」という、当時用いられていた「皇紀」によって建国2600年を誇り讃える歌もあったし、「九段の誉」という靖国神社に関わる曲もあった。「妻恋旅姿」という「妻恋道中」の流れを思わしめる曲もあり、更には映画の「怪談道中」や「弥次喜多道中膝栗毛」などにも出演した。この弥次喜多物の主演は名優高田浩吉であった。

昭和16年（1941）には18曲の新曲だったが、「仏印だより」「奥支那だより」という例の「たより」曲が日本軍の進攻した土地に及ぶ状況で歌われた。だが昭和13年は新曲57曲、14年は35曲、15年は24曲、17年は「露営の一夜」「そうらん節」などを含む16曲、18年（1943）は２曲というように曲数が移って行くのは時局を反映したものであろう。18年に歌った「北洋の護り」という曲では、「アリュウシャン」という地名を明記して守備の日本兵士を謳っていたのに、遠くない時期にアッツ島守備隊2500人の玉砕という戦局の推移だったのである。

アッツ玉砕は５月の末のことであったが、この18年４月の20日に松本力治は秋田聯隊に入営することになる。いうまでもなく彼は東京で活動していたのであるから、召集令状のことを妻澄子から通報された時も、渋谷の「聚楽」なる映画館に出演し熱唱している時であったという。関係者は動揺したが本人は敢然として、会場に令状の来たことを報告したうえで、勇んで軍務に就くことを宣言して、拍手の中で「男ひとたび」という曲を歌ったという。

松本二等兵が入営した時秋田の聯隊は、「北部第十七部隊」を通称としていた。その部隊に30代半ばの補充兵として入隊したのである。兵種は輜重兵であった。当時「輜重特務兵」と呼ばれていた、武器・兵糧などの輸送を本務とした隊士で、歩兵とか騎兵とかのように戦闘を本務とする兵士ではない。

入営１週間にして、４月27日秋田駅を出発して任地に向かうことになる。160名の隊で石川曹長という指揮者であったという。曹長は下士官の最高位であるから、相当の軍隊経験のある隊長であったと思われる。乗車した車両は鎧戸まで閉めて外からは見えない状態で広島に着いたのが29日の天長節当日だった。広島は軍都とでもいうべき性格を負い、明治時代にも戦時に大本営が置かれたりしたところで、宇品港は軍港でもあった。私の父が日露戦争で戦地に赴く際もこの宇品港から出発したと子供の頃に聞いたことがある。

目的地はマニラであった。無事着いたとしても航海は苦しいものであったと考えられる。立派な客船である筈もなく、また強固な軍船であった筈もないからである。昭和18年などの段階は南方に向う日本船は、米潜水艦の攻撃により台湾海峡あたりで撃沈される例が極めて多かった。海中に放り出されて、ブイなどは乏しく、太い青竹を然るべき長さに切ったものが積んであり、運良くそれに摑まり浮いていて時を経て駆逐艦に拾い上げられたという、先輩学徒兵の経験談を聞いたことがある。マニラでは「暁二九四六部隊」なる第一揚陸隊の補充兵として編成されたという。

実は昭和13年慰問の節、「派遣軍司令官」の畑俊六陸軍大将は、上原敏歌手に陸軍は貴下を召集しない。歌で皇軍を激励し、国の為に尽して欲しい旨の話があったと、『歌手上原敏・彗星の如く』（大館上原敏の会）に見えるような説もあるので、入営後も彼を戦地には派遣せず、内地に残って特技による奉公を画策する動きもあったと伝えられるが、彼自身は敢然と前線行を望んだというのである。今の平和社会と違ったあの軍国主義といわれた時代では、男子として自然の意志であったのかもしれない。

マニラの10日間程の滞在中に、放送局に出頭の命があった。彼の歌声がフィリピンで日本軍慰安の任を果たしたことは本懐であったに違いない。ラバウルへの出発命令で貨物船に分乗した彼は、まず６月下旬にセブ島に上陸した。時間があったからであろう。そこで彼ら未教育兵の訓練が１ヶ月半程行われ、彼の中隊長は、「陸士出の若い門家建次大尉」（伊多波英夫『密林の絶唱上原敏』）であったという。職業軍人である軍関係

の陸軍士官学校出身士官は《実砲》と呼ばれ、私どものように予備士官学校出身の者など予備役士官は《空砲》と蔭口で呼ばれる社会であったから、関係者の関心や注目が資料上にも残ったのであろう。教育期間を終了すると、鹿角の小坂出身である上級兵士樽田喜蔵の部下として功績係の助手の任に当たった。

８月半ばにニューブリテン島ラバウルに移ることになり、15日夜壮行会で「妻恋道中」を久方ぶりで歌った彼は、日本領南洋のパラオ諸島内の要津コロール港に寄港し、そこの野戦病院で入院している人々を慰問する演芸会があり、名調子で数曲彼も歌って300人程の将兵を満足させた。

パラオを出てラバウルに向う途中は、空からと海中からの攻撃を受けつつも無事到着したものの、そこでは連合軍の制圧下になっていたので、更に９月１日夜陰を利用しニューブリテン島最西北のツルブに移動到着した。折角苦労して上陸を終えたのに、３日に上陸地点は爆撃され、彼の中隊でも84人が戦死したという。

昭和18年（1943）暮れにニューギニア本島に転進することになり、不利な戦況の中でシオに上陸し、更にウエワクに移動、19年（1944）３月７日にウエワクの第一一七兵站病院の開設一周年記念演芸会や、その３日後の陸軍記念日の師団司令部の演芸会で、また歌芸を披露した。４月12日から15日にかけて暁二九四六部隊はウエワクから360キロのホーランジャに移動することになった。４月22日ホーランジャには豪州軍が上陸したので、目的地に到達するのは困難であった。

密林の中での不自由な生活の中で演芸会があれば上原はスターであったが、彼はマラリア病にかかっていた。或る日、野戦病院に慰問に出掛けるという彼に、隊の軍医が許可を与えなかったが、彼は「明日をも知れぬ戦友が多勢待っているのでどうしても」というので、軍医が付添って出発したが間もなく敵機が襲って来て閃光と弾丸の雨の中で上原の姿は見えなくなり、軍医は一応山の方に脱出したが原住民に捕らえられ豪軍に引き渡されることになった。昭和22年（1947）の公報では、松本力治兵長は７月31日付で病死したということになっているという。

中嶋　　照

明治22年（1889）３月20日に東京市牛込区（市谷）富久町19番地に大和田敬時とむ免（のち梅代）の次女として誕生した。大和田家は仙台藩士の家柄であったが、敬時は若くしてキリスト教に心なびき、家督は妹に譲り、明治７年（1874）という廃藩置県後３年にすぎない早い時期、北海道に渡り、ロシア正教のニコライが創立した「函館正教会附属学校」に入学した。そしてロシア語を学ぶためであろう、８年には東京の「ロシア語学校」に移っている。この語学校は「駿河台正教学校」の前身校である。

明治16年７月に「正教神学校」２期生として卒業する。その同期卒業生は４名であるが、１期生は２名であった。その２名の中の栗野得一郎という仙台藩士の後である人物の妹が、敬時の妻のむ免（梅代）である。照はこのような正教信仰の親族の中で生まれ育ったのである。

父の敬時は、伯父の得一郎と共にニコライの布教活動に従い、ニコライ堂の建立に尽力した。二人は「大主教ニコライの十哲」である。敬時のクリスチャン名は「伊望」であるが、この名はキリスト十二使徒の「ヨハネ」に当たる名である。この神学校の１・２期生たちの多くはロシアに留学しモスクワ、レニングラード、キエフなどの神学大学で学んだが、伊望は身体的に結核を患ったために留学をしなかった。駿河台の母校で教育に当たり、翻訳の仕事などに励んでいた。

関連して著名な事件である明治24年（1891）ロシアのニコライ二世が皇太子で来日した際、得一郎は通訳の任に当たっている。例の皇太子が大津で護衛に当たるべき津田巡査に刺された事件の生じた際のことである。

父敬時は大正元年（1912）に仙台に帰り病の静養に当たっていた実家の離れで、翌年３月27日に57歳で亡くなった。その頃はもう大人として照は東京で活動していた。

照は明治28年（1895）４月に東京市本郷区誠之小学校に入学し、卒業して日本女学校に入学した。39年（1906）３月に卒業すると、明治33年（1900）に後の「津田塾大学」になる女子英学塾を創立していた、幼時の米国留学で有名な津田梅

子女史が、38年（1905）に創立していた「日本キリスト教女子青年会（YWCA）」の社会奉仕活動に参加した。

そこでは主人公が生涯の親友を得た。市川房枝である。やがて活動を通じ、平塚らいてう・神近市子・吉岡弥生・山川菊栄・羽仁もと子などの有名女史達と交りをもつようになる。修養と活動とに於いて、YWCAが主人公照の人格形成に与えた影響は絶大なものがあったと考えられる。

雷鳥は本名明（はる）、らいてう（ちょう）は号で「新しい女」を名乗り、「原始、女性は太陽であった」と論ずる女性解放運動家。市子は大杉栄を刺したこともある文筆評論家。弥生は明治33年（1900）日本最初の「東京女子医学校」を創立した、女子の教養と地位の向上を推進した女医。菊栄は山川均夫人の社会主義運動家、もと子は報知新聞で日本最初の婦人記者となり、のち婦人雑誌を創刊、婦人自主運動を推進した教育運動家、夫の吉一と共に「自由学園」を創設しただけでなく、娘の説子を育てた教育家でもある。

そして房枝は照と終生親交が続く人であるが、明治26年（1893）愛知県に生まれ、雷鳥らと「新婦人協会」を設立し、婦人参政権獲得運動の先頭に立った人物である。第二次大戦後「新日本婦人同盟」を結成し、参議院議員になったことは周知の如しである。この人との親交は照女史の本性と活動に深く影響したと認められる。

しかし女学校卒業段階から婦人運動のみに没頭していたわけではなく、萩岡松龍に就いて日本伝統音楽の琴の稽古に励んだり、キリスト教青年会その他においても「家事其ノ他」を修めたと、履歴書に明記されているというから、伝統的日本文化についても充分の学習を実践していたことがわかる。この秀れた女性が秋田県北の住人となったのは、秋田県人と結婚したからである。

大正7年（1918）3月、秋田県北秋田郡沢口村大字脇神川口の人で在京生活を営んでいた中嶋京四郎と結婚するのであるが、秀れた記録である嗣子中嶋忠輝氏の『養母（はは）「中嶋　照」を語る－婦人参政権獲得の半生－女性よ、権利の上に眠るな！』という著述にも「どのような経緯で結婚に至ったかは不明」とある。

続けて忠輝氏は「10代半で結婚するのが一般的であった時代、才色兼備の照が29歳まで結婚しなかったのは、結婚する意思がなかったとみるのが妥当と思われる」と述べ、「クリスチャンとして婦人解放運動に一生を捧げようとしたのではなかったかとも想像される」と記している。

大正の言い方では夫34歳・妻30歳という表現が普通であるから、当時としては晩婚そのものであるが、相手が東北の出身者であるということに、親が仙台出身であるという自分のルーツと考え合わせるとき、信頼感が増すということがあったのではないかとも考えられる。同郷性は男性の側からも信頼して生活できるという判断要素になり得る筈である。相互理解があっての結婚だったと考えられる。この時嫁ぐ娘の照に母梅代が贈った山下リン作のイコンが伝わるという。ギリシア正教からロシア正教で重んぜられる聖画像であり、山下の名も知られている。敬虔な信仰心が中嶋家に伝わることになった次第である。昭和5年（1930）に東京で行われていた「第一回全日本婦選大会」についてもクリスチャン精神のもと参加したわけであろう。

ところで昭和3年（1928）にも一時帰郷したことはあった由であるが、同8年（1933）になると沢口村永住と決めて夫婦は帰郷した。思うに前々年は満洲事変、前年は上海事変や五・一五事件などがあり、この年には国際連盟脱退などという、国際的軍事的な問題が起きる時勢になり、郷里の農村の安定充実に努めようという発想が生じたのかもしれない。

帰郷するや小学校移転問題で紛糾していた村の騒ぎを解決した。理想的な新農村を築くという目的を実現しようと、生活改善の方途を追及することになり、9年（1934）には沢口村婦人会長に就任する。この頃から生活改善の運動は現実化し、台所や便所の改善、寝室の万年床の善処、栄養学的見地からの食生活の充実などについて、婦人達の意識を高めて、更に実態を形成する指導を展開している。

このような日常生活の改善だけではなく、未婚の若い女性達には「白百合学級」という教育指導の組織を樹立し、裁縫や料理などの実技指南だけ

にはとどまらず、一般教養科目の学習指導をも行うようにしたのである。当然夫京四郎の指導力も発揮されたのであろう。

昭和10年（1935）11月13日には大正天皇の第二皇子秩父宮雍仁親王が中嶋家に台臨されるという、格別のことがあった。親王殿下は帝国陸軍の将校で弘前師団で大隊長の任にある時期に当たり、大野岱での軍事演習の折で、御休憩のため来宅されたのである。中嶋家が旧家であることはいうまでもないが、大野岱から見て立寄られる範囲には然るべき邸宅は同家だけとは限らない。思うにやはり照夫人の生活指導活動などが評価されており、選択の要素になったものであろう。

先に示した「中嶋照を語る」の書中には、京四郎・照夫妻が、「お立寄りご休憩」のお礼として賜わった「金3円」の「熨斗袋」などを飾った机を間に正装正坐する写真が載っている。その説明には「本庭に平沼騏一郎総理揮毫による記念碑が建立されている」と記されている。平沼が総理になったのは昭和14年のことであるから、数年経ても記念碑が建てられるような光栄だったのである。

昭和12年（1937）7月7日当時「支那事変」と称された日中戦争が勃発する。この年京四郎は沢口村長に就任する。非常時には是非必要な村の指導者だったのであろう。照夫人は兵士への慰問袋の発送をリードし、出征兵士留守家族への支援に活躍し、戦没者遺族への援助に指導力を発揮して努力することになる。

昭和10年頃から生活改善運動と関連して今和次郎早稲田大学理工学部教授との交流が行われるようになる。今博士が家庭科学研究員であったことや昭和12年（1937）「東北地方農山漁村住宅改善調査委員」に就任したことなどによるものであろう。16年（1941）には「農村住宅改善」なる東宝文化映画の監修に当たった。且つ自ら出演もした。この関係であろう、この年3月24日～26日に東宝文化映画部は沢口村にやって来て、中嶋指導の改善生活を撮影し、全国に紹介したのである。運動の実態が広く知られ評価されたわけであるが、いうまでもなく村民自体の興奮や躍動も実現したに違いない。今博士が昭和25年（1950）の鷹巣大火の災に招かれ、焼跡に立って復興に関する講演を行い話題になったのも、「ソビレ（宋美齢）」と呼ばれた照女史の行動力のもたらしたところである。呼称は蔣介石夫人を連想する活動力に由来する。

京四郎村長の任期となったのは昭和12年から戦後の同21年までであったが、当時の通例の如く村から村長の給料などというものは出なかった。地主制度の無くなった戦後は中嶋家も財政的に苦しかったと思われるが、東京に市川女史に托した貸家を持っていて、それが家政を支えたという。

戦後「婦人参政権」が認められると、女性の投票権が確立したのみでなく、役職に関する立候補も実現する。21年（1946）4月10日の新制度第一回の衆議院議員の選挙で、秋田県では和崎ハル女史が10万247票獲得のトップ当選をしたことは、平成15年の和崎女史についての館話でも話題とした通りであるが、「新日本夫人有権者同盟」の秋田支部では中嶋女史を推す考えも強かった。しかし両者共に初め立候補の意志がなかったので、市川女史の調整力で和崎候補が立ったという次第であるが、政治家の力としては、中嶋議員の実現の方が勝っていたのではないかと思われるところもあるが、それには事情があった。夫の祖母が、この時立候補の成田重太郎氏の母と姉妹であったということから、身内の票争いを避ける考えが強かったというのである。照女史も田舎の親類関係では考えも控え目にならざるを得なかったのであろう。

時代は移り、親友市川房枝女史が、戦後に何と「公職追放」になっていたのである。我々の常識では市川女史が、「日本を侵略戦争に追いこんだ指導者」でもなく、まして「日本の民主化を妨げた人物」でもないが、戦前から戦中も言論界のリーダーの一人であった女史を追放にという判断をした機関もあった訳であろう。

その追放を不当と考えた主人公の中嶋女史は、昭和25年の4月に占領軍のマッカーサー司令官に解除を求める書面を提出するのである。忠輝氏の著によってその写真影像を確認できた。紹介すれば「**請願書**　市川房枝先生の追放は婦人の先覚者であっただけ（に、）現在及び将来共、婦人運

動にとつて至大な損失であり、然も先生の長年にわたる言動から推しても民主的平和主義者であつて、追放の措置については尚諒解に苦しむものがあります。本日、全国的に展開された婦人週間行事の記念大会に当り、全郡婦人の総意に基づいて、先生の追放解除請願を決議致しましたので、即時断行されるように請願する次第であります。昭和二十五年四月十日　秋田県北秋田郡連合婦人会代表　中嶋照子㊞　連合軍最高司令官マッカーサー元帥」という堂々たるものである。

追放解除は昭和25年（1950）10月13日に実現した。「新日本婦人同盟」の会長から改称した「日本婦人有権者同盟」の会長に復帰就任した市川女史を、暮れも迫った12月4日に鷹巣に招き、講演を聴き、解除の「祝賀会」を開いた主人公の満足感は察するに余ある。会費は100円とあるが、この頃大学の助手であった当方の給与は5千円程であったと記憶するから、今100円から受ける微々たる金額ではない。中嶋女史の歓びも察せられる。

主人公のその後の存在感は、昭和33年（1958）仙台市での「全国婦人有権者同盟総会」への市川女史との出席、37年の「秋田県文化功労者（民生）」の表彰、43年11月の「勲五等瑞宝章」叙勲と続く。更には昭和48年（1973）7月12日85歳で逝去されるや18日の葬儀における市川女史弔辞中の「終戦後は町会議員にもなり」の顕彰などでも充分に知ることができる。